原著論文

パピーウォーカー経験の有無による 生後1年間の問題行動出現の違いについて

水越 美奈¹⁾、中村 有香¹⁾、細井 淳子¹⁾、及川 友恵^{1) 2)}、関口 歩²⁾、中村 透²⁾

1) 日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科

2) 財団法人日本盲導犬協会神奈川訓練センター

Difference of behavior problems of guide dog puppies by puppy walking experience.

Mina Mizukoshi¹⁾、Yuka Nakamura¹⁾、Junko Hosoi¹⁾、Tomoe Oikawa^{1) 2)}、Ayumi Sekiguchi²⁾、Toru Nakamura²⁾

1) School of Veterinary Nursing & Technology, Nippon Veterinary & Life Science University

2) Japan Guide Dog Association, Kanagawa training center

抄 録

パピーウォーキング中の問題行動の出現について、生後3カ月から12カ月齢の間で、それ以前のパピーウォーカー経験の有無で比較を行った。質問は2005年3月1日から2008年7月16日生まれのラブラドル・レトリバーをパピーウォーキングした193家庭に対して、毎月6つの問題行動（排泄の失敗、甘噛み、破壊行動、散歩時のリードの引っ張り、人への飛びつき、無駄吠え）の有無を2者選択で行った。「排泄の失敗」と「甘噛み」では3カ月齢時のみで有意差（ $P<0.05$ ）が、「破壊行動」、「散歩時の引っ張り」、「人への飛びつき」では飼育初期から中期で有意差（ $p<0.05$ ）が見られたが、「無駄吠え」では全期間にわたって有意差は認められなかった。またいずれの項目でも10カ月齢以上では有意差は見られなかった。このことから過去の飼育経験は特に飼育初期に効果を発揮することがわかった。またいずれの項目においても月齢による出現傾向や推移はPW経験者と未経験者で同様であったことから、各項目に対するアドバイスにはそれぞれ適切な時期があることが示唆された。

キーワード：盲導犬、子犬、問題行動、パピーウォーカー

Abstract

This study was conducted to gather information on the behavior problems during puppy walking (3 month old to 12 month old), and draw a comparison between novice and experienced puppy walker. The questionnaire was answered in the presence or absence about 6 problems (housebreaking, play-biting, destructiveness, pull on leash, jump on people, and excessive barking) each months of age. A question survey was taken 193 puppy walkers who brought up Labrador Retrievers that were born from March 1st 2005 to July 16th 2008. Prevalence of "housebreaking" and "play-baiting" were shown significant differences ($p<0.05$) on only 3 months of age. And prevalence of "destructiveness", "pulling on leash" and "jumping on people" were shown significant difference ($p<0.05$) from early to medium period of puppy walking. In "excessive barking", significant difference was not found in all months. It was shown that experienced puppy walkers made good use of their experience in early and medium period of puppy walking. And because the movements of appearance ratio in all behaviors were kept parallel to another ones in all months, it was suggested that there was the time of advice that was appropriate for each behavioral problems.

Keywords : Guide dogs for the blind, Puppy, Behavior problem, Puppy walker

パピーウォーカー経験の有無による生後1年間の問題行動出現の違いについて

I. はじめに

盲導犬はその育成施設において身体的、行動的を含めた計画的な繁殖と選択、そして盲導犬としての歩行訓練を経て育成される。またほとんどの盲導犬育成施設では、育成過程における子犬期の2カ月齢から約1年間を子犬飼育ボランティア（パピーウォーカー、以下PW）の家庭で育てるパピーウォーキングシステムを持つ。つまりほとんどの盲導犬の子犬は最初の1年間をPWと一般的に呼ばれるボランティア家庭で育てられる。

盲導犬育成におけるパピーウォーキングシステムは、子犬を一般家庭の中で育てることで様々な人や環境に対して社会性を身につけるとともに、人間社会の中での適切な行動やトイレのしつけなどの基礎的なトレーニングを子犬に学ばせることを目的としている。一般家庭に預けるもう一つの理由としては、飼い主（人）を信頼し、絆を作る経験を行うことが挙げられる。盲導犬とその使用者は相互に信頼関係を持つことで、協調した満足な歩行を得ることができると言われている¹⁾。またVoithらは犬の問題行動の発現はトレーニングがうまくいかないためよりむしろ、犬と飼い主の関係がうまくいっていないことが原因になっていると報告しており²⁾、幼少期から人との信頼関係を築くことは犬の将来にとって重要であることは明らかである。

パピーウォーキングはボランティアに支えられている活動であるため、何度も繰り返し行う家庭もあるが、家庭の事情等により1頭限りでPWを辞めてしまう家庭もあり、PWの構成は常に流動的である。また初めてPWを行う家庭では犬を飼うこと自体が初めてである場合がほとんどである。このようにPWの犬の飼育やしつけの経験はさまざまであると考えられる。

犬を初めて飼う飼い主はその子犬に対する期待度は大きく、そのイメージは成犬であり、そして見た目であることがほとんど³⁾と言われている。また犬を放棄してしまった飼い主の多くは基本的な犬についての知識が欠けていたことが原因であったことが報告されている⁴⁾。これらを考慮すると、盲導犬候補の子犬を育てた経験があるPW経験者とそうでないPW初心者での間でも盲導犬候補の子犬に対するイメージや期待度、心構えはかなり異なるのではないかと考えられる。またこれらの考えの違いは、両者間における子犬を飼育する上での行動上の問題に対する意識にも影響するのではないだろうか。

また犬の性質は犬種によって傾向があることがいくつか示されている^{5),6),7),8)}。そのため、同じ犬種を育てた

経験は次に同じ犬種の子犬を育てるのに役立つことは容易に想像できる。しかし、それぞれ個々の性質は犬種的側面の違いによるものだけではない。いくつかの性質（遊び好き、好奇心、不安、社会性）は同犬種でも個体により大きく異なることが報告されている⁹⁾ように、PW経験者でも前回の子犬飼育で経験したことは異なる悩みが生じることも考えられる。

家庭犬においては、行動上の問題は1歳齢以下であっても犬の放棄や安楽死の主要な原因のひとつであり^{10),11),12),13)}、また犬のしぐさや行動は、飼い主のその犬に対する親しみや愛着に重要な役割を演じている¹⁴⁾。つまり犬の飼育初期の行動上の問題の有無は、家庭犬がその家庭で幸せに暮らしていくためにも大きな影響を与えられられる。これらの点では盲導犬に限らず、飼育初心者に対して飼育初期に適切な指導を与えることはとても重要なことである。

前回、我々はPW経験の有無が子犬（3カ月齢）の飼育に影響を与えるか否かについて調査を行った。そこで我々はPW経験者と未経験者の間で「排泄の失敗」、「飛びつき」、「破壊行動」、「甘咬み」について出現率に有意差があったことから、PW未経験者に対してこれらの行動についての指導を飼育前に行うことは特に大切であることを示した¹⁵⁾。

今回、我々は調査期間を広げ、行動上の問題を継続的に調査することで月齢によってその相違に変化があるのか、過去の子犬飼育経験がどれだけ次の飼育に役立てることができるのかについて調査し、さらにPWや飼い主に対して「いつ、どのような」アドバイスを与えれば、そのアドバイスが効果的に機能することができるかについて検討を行なったので報告する。

II. 方法

財団法人日本盲導犬協会神奈川訓練センターが、飼育指導を目的としてPWに対して行っていた月齢報告書の中で2005年3月1日から2008年7月16日までの期間に生まれたラブラドル・レトリバー 193頭の3カ月齢時から12カ月齢時データを使用した。その中から、「排泄の失敗」、「甘咬み」、「破壊行動」、「散歩時の引っ張り」、「人への飛びつき」、「無駄吠え」の発現の有無の数を抽出した。以上の質問に対してイエスあるいはノーの答えがあるもののみを有効データとし、無回答だったものはデータから除き、その有効データをPWの経験の有無で分類した。実際に使用したデータは表1のとおりであった。そしてPW経験者と未経験者において各対象行動出

表1 実際に使用したデータ

月齢	飼育経験あり	飼育経験なし
3 か月	71 (♂33 : ♀38)	101 (♂52 : ♀49)
4 か月	73 (♂35 : ♀38)	97 (♂51 : ♀46)
5 か月	65 (♂28 : ♀37)	93 (♂46 : ♀47)
6 か月	67 (♂30 : ♀37)	93 (♂46 : ♀47)
7 か月	63 (♂27 : ♀37)	91 (♂43 : ♀48)
8 か月	61 (♂26 : ♀35)	86 (♂43 : ♀43)
9 か月	59 (♂25 : ♀34)	81 (♂40 : ♀41)
10 か月	48 (♂21 : ♀27)	75 (♂40 : ♀35)
11 か月	42 (♂19 : ♀23)	69 (♂36 : ♀33)
12 か月	34 (♂17 : ♀17)	47 (♂21 : ♀26)

現率を1カ月ごとに比較し、母比率の差の検定、カイ二乗検定を行った。

Ⅲ. 結果

1. 排泄の失敗

3カ月齢時でのみ、PW未経験者での出現率が明らかに高い ($P<0.05$) が示された。しかし4カ月齢以降では出現率の明らかな違いは認められず、月齢による減少

図1 排泄の失敗

図2 甘咬み

傾向は両者においてほとんど同様であった (図1)。

2. 甘咬み

3カ月齢でPW未経験者での出現率は明らかに高く ($p<0.05$)、その差は約3倍程度あった。しかし有意差は、「排泄の失敗」と同様に3カ月齢のみでみられた。6カ月齢以降での出現率は、両者でほとんど変わりはない (図2)。

3. 破壊行動

3、4、6、8カ月齢でPW未経験者の出現率は明らかに高かった ($p<0.05$) が、9カ月齢以降の出現率ではほとんど変わりはない。また両者ともに同じような減少経過を示した (図3)。

4. 散歩時のリードの引っ張り

両者とも4カ月齢で出現率は急激に上昇し、PW未経験者の出現率は6、9カ月齢を除き、4カ月齢から10カ月齢まで明らかに高かった ($p<0.05$)。また全ての期間においてPW経験者と未経験者の出現率はほぼ平行に推移した (図4)。

5. 人への飛びつき

5、6、7カ月齢と9カ月齢でPW未経験者の出現率は明らかに高かった ($p<0.05$)。また全ての期間において出現率はほぼ平行に推移したが、10カ月齢以降では両者の出現率にほとんど変わりはない (図5)。

図3 破壊行動

図4 散歩中のリードを引っ張り

パピーウォーカー経験の有無による生後1年間の問題行動出現の違いについて

図5 人への飛びつき

図6 無駄吠え

6. 無駄吠え

全ての月齢で出現率に差はみられなかった。出現率は両者とも月齢に伴って減少傾向がみられたが、その推移は両者でほとんどかわらなかった。有意差は見られなかったが、ほとんどの月齢でPW経験者のほうがわずかに未経験者より出現率が高かった(図6)。

IV. 考察

「排泄の失敗」と「甘咬み」の出現率はPW経験者と未経験者において特に飼育初期に大きな差異があることが示された。つまりPWの経験は子犬の飼育初期において、「排泄の失敗」と「甘咬み」に対して特に役立っていることから、これらの問題の予防や対処法は、過去の飼育経験によって以前の子犬から学び取った技術が他の子犬にも応用できると考えられた。「排泄の失敗」や「甘咬み」は子犬の飼育初期に最もよく見られ、かつ最も飼い主が困る問題のひとつである。新規PWや犬を始めて飼う人に対して子犬を家に迎え入れる前にこれらの適切な指導を行えば、飼育未経験者での出現率を抑えることにつながるのではないだろうか。

「破壊行動」や「散歩中のリードの引っ張り」、「人に対する飛びつき」では、過去の飼育経験がパピーウォーキ

ングの早期から中期で役立つことが示された。これらの問題は、特に若年期でトラブルになることが多い。おそらくPW経験者では、若年期で強く現れるであろう行動を予測することができたことから、早めの対応をすることでこれらの行動の発現率を抑えることができたのではないだろうか。これらのうち、「破壊行動」と「人に対する飛びつき」はパピーウォーキングの中後期(9、10カ月齢以降)から、両者の出現率にはあまり相違が見られなくなった。しかし「散歩中のリードの引っ張り」では全体にわたってその相違には変化がなく、PW未経験者では一貫して出現率が高いことが示された。「散歩中のリードの引っ張り」行動はその他の行動より学習要素が強い行動であることから、経験でより強化されることが考えられ、早期からの対応がその後の行動に大きな影響を与えるのではないかと考えられた。

「無駄吠え」では、PW経験者と未経験者において全期間で有意な相違は見られなかった。つまり「無駄吠え」に対しては、過去における犬の飼育経験はほとんど役に立たないと考えられた。吠え行動には様々な原因が存在する。さらに刺激に対する反応も個体によって幅があるため、過去の経験で培った対応が効果を示さなかったのかもしれない。

また今回の結果から、ほとんどの項目でそれぞれの月齢ではPW経験者と未経験者間で出現率の差異はあっても、月齢によるグラフの推移は同様な動き方を示していた。推移の動向が似ているということは、各々の問題には起こりやすい時期というものが存在し、それは飼い主の飼育経験には関係なく起こるということが考えられる。つまりそれぞれの問題行動にはアドバイスに適する時期がそれぞれに存在すると考えられるのではないだろうか。

つまり初めて犬を飼う飼い主やPWに対しては「排泄のしつけ」と「甘咬みの抑制」、「飼い主の大事なものを壊さないようにする」については子犬が新しい家に迎え入れられる前に、「リードを引っ張らずに歩く」と「人に対して飛びつかずに挨拶する」については飼育初期に指導を行うようにすれば、より快適に楽しく子犬を飼育することができるだろう。「散歩のときにリードを引っ張って歩く」は有意差こそなかったが、PW経験者と未経験者で12カ月齢においても唯一出現率に差が見られた。「リードを引っ張って歩く」犬は、盲導犬の訓練に入った場合、それを矯正するのに余計な時間をその教育に費やさなければいけないと考えられる。このことから、パピーウォーキングの中期から後期にかけて、リードを引っ張らずに歩くことについてしっかりと指導を行うこと

は、PWに対して役立つだけでなく、その後の盲導犬訓練の時間短縮にも貢献するかもしれない。また吠える問題に関しては、飼育経験の有無に関わらず問題を引き起こす割合は変わらないので、飼育経験に関わらず早期からの適切な指導が大切ではないかと考えられた。

今回の調査は子犬の問題行動をパピーウォーキングの経験の有無で比較を行ったが、これらの結果は家庭犬の子犬の指導にも応用することができると考えられる。過去の報告によると、基本トレーニングクラスに通わなかった犬はより放棄される危険性が68.1%増し¹⁶⁾、子犬の社会化クラスに通った犬は放棄される可能性が低くなる¹⁰⁾ことが示されている。今回の結果からも早期に何らかの適切な対応があれば、問題行動の出現率は抑えられる可能性が示唆されることから、飼い主や犬に対する早期の教育はとても重要であることが考えられた。

V. 結論

今回の結果から、PW経験者と未経験者の間で子犬の多くの問題行動の出現率に相違が見られ、その相違は特に飼育初期から中期に発揮されることがわかった。しかし飼育後期ではその違いはほとんど見られなかった。つまり過去の飼育経験は子犬が小さい時に発揮されるが、時間の経過とともにその過去の経験は現在の経験に相殺されてしまうのかもしれない。しかし、飼育経験のない飼い主やPWに対して、飼育開始前や飼育初期に適切な指導を与えることは、問題行動の出現率を軽減し、飼育に対するモチベーションを高めると考えられる。

また各々の問題行動の出現率はPW経験者と未経験者間で出現率の差異はあっても、月齢による出現率の推移は飼育経験に関係なく同様な動きを示した。つまり各々の問題には起こりやすい時期というものが存在し、各々の行動に対して適切なアドバイス時期があることが示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、(財)日本盲導犬協会神奈川訓練センターの職員の皆さまと子犬飼育ボランティアの方々のご協力をいただきましたことに深く感謝致します。

文献

- 1) SANDERS, C. (2000). The impact of guide dogs on the identity of people with visual impairments. *Anthrozoos*, **13**, 131-139.
- 2) VOITH, V. L., WRIGHT, J. C., DANNEMAN, P. J. (1992). Is there a relationship between canine behavior problems and spoiling activities, anthropomorphism, and obedience training?

- Appl. Anim. Behav. Sci.*, **34** (3), 263-272.
- 3) MARDER, A. & DUXBURY, M.M. (2008). Obtain a pet: realistic expectations. *Vet. Clin. North. Am. Small. Anim. Pract.*, **38** (5), 1145-62.
- 4) NEW, J. C., SALMAN, M.D., KING, M., et al. (2000). Characteristics of shelter-relinquished animals and their owners compared with animals and their owners in U.S. pet-owning households. *J. Appl. Anim. Welf. Sci.*, **3**, 179-201.
- 5) HART, B. L. & HART, L. A. (1985). Selecting pet dogs on the basis of cluster analysis of breed behavior profiles and gender. *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, **186** (11), 1181-5.
- 6) HART, B. L. & MILLER, M. F. (1985). Behavioral profiles of dog breeds: a quantitative approach. *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, **186** (11), 1175-80.
- 7) BRADSHAW, J. W. S., GOODWIN, D., LEA, A.M., et al. (1996). A survey of the behavioral characteristics of purebred dogs in the United Kingdom. *Vet. Rec.*, **138** (19), 465-468.
- 8) TAKEUCHI, Y. & MORI, Y. (2006). A comparison of the behavioral profiles of purebred dogs in Japan to profiles of those in the United States and the United Kingdom. *J. Vet. Med. Sci.*, **68** (8), 789-796.
- 9) SVERTBERG, K. (2006). Breed-typical behavior in dogs - historical remnants or recent constructs? *Appl. Anim. Behav. Sci.*, **96**, 293-313.
- 10) PATRONEK, G. J., GLICKMAN, L. T., BECK, A. M., et al. (1996). Risk factors for relinquishment of dogs to an animal shelter. *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, **209** (3), 572-81.
- 11) SCARLETT, J. M., SALMAN, M. D., NEW, J. G. Jr., et al. (1999). Reason for relinquishment of companion animals in U.S. animal shelters: selected health and personal issues. *J. Appl. Anim. Welf. Sci.*, **2** (1), 41-57.
- 12) SHORE, E. R. (2005). Returning a recently adopted companion animal: adopters' reasons for and reactions to the failed adoption experience. *J. Appl. Anim. Welf. Sci.*, **8** (3), 187-98.
- 13) HARRON, M. E., LORD, L. K., HILL, L. N., et al. (2007). Effects of pre-adoption counseling for owners on house-training success among dogs acquired from shelter. *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, **231** (4), 558-62.
- 14) SERPELL, J. A. (1996). Evidence for an association between pet behavior and owner attachment levels. *Appl. Anim. Behav. Sci.*, **47**, 49-60.
- 15) 水越美奈、及川友恵、北口めぐみ・他 (2009). パピーウォーカー指導に関する一検討：子犬飼育経験による行動上の問題の違いについて. 日本補助犬科学研究, **3** (1), 17-22.
- 16) DUXBURY, M., JACKSON, J., LINE, S., et al. (2003). Evaluation of association between retention in the home and attendance at puppy socialization classes. *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, **223** (1), 61-66.